小児科

統括部長　杉田　恵美

１．部門目標

千葉県保健医療計画において示された千葉市の地域小児科センターとしての役割を担うべく、小児救急拠点病院として充実を図り、小児総合診療の幅を拡大し地域の小児医療に貢献します。１）内因系・外因系疾患を問わないER型小児救急をトリアージナースとともに実践し、常時小児救急患者を受け入れます。２）最善の医療のため多職種によるチーム医療を実践します。３)健診（院内外）および予防接種の実施など小児保健診療へ参加します。４）1次医療機関、3次医療機関、消防局、保健所、児童相談所、千葉市医師会など他の関連機関と円滑な連携をし、地域医療を支援します。５）地域の小児食物アレルギー診療の基盤となるよう、食物経口負荷試験を実施します。６）小児科専門研修基幹施設として小児科専攻医を指導・育成します。７）公開カンファレンスを開催して地域の小児医療の質向上に貢献します。８）初期研修医と医学生の研修・実習施設としても充実を図ります。

２．勤務体制とスタッフ

①勤務体制

小児科医が小児救急患者を 365 日 24 時間体制で変わらず受け入れています。夜間、土日、祝日は、日勤・夜勤の小児科医が割り当てられ、常時小児科医が在院する体制としています。日中は救急当番の小児科医が迅速に対応をしています。17 時から 21 時までの千葉市夜間応急診療を含む救急外来において、小児専従看護師が院内トリアージを実施し、救急外来の適正化を図っています。緊急性が高い患者は、当科の医師が、日・祝日は小児科救急外来担当医師が対応します。千葉市夜間応急診療の前準夜帯を週１回月曜日（第１月曜日を除く）に、水曜日の前準夜帯と深夜帯を小児科専攻医が担当しています。

②スタッフ

令和５年４月１日時点

副院長・小児科	金澤　正樹
統括部長（成人先天心兼務）	立野　滋
統括部長	杉田　恵美
部長	小野　真
部長	江畑　亮太
部長	高田　展行
部長	加藤　いづみ
部長	森山　陽子
主任医長	小玉　隆裕
医長	鋪野　歩
医長	栗原　恵理佳
医長	深野　優帆
医長	吉本　拓郎
医長	池田　翔
医長	多湖　孟裕
医師	吉野　忠怨
医師	小泉　和久
医師（教育担当）	寺井　勝
専攻医	石丸　翔一

専攻医　　若月　良介
専攻医　　松岡　高弘
専攻医　　井上　佳奈
専攻医　　須藤　真奈実
専攻医　　宮本　薫子
専攻医　　岡田　雄輝
専攻医　　高橋　一誠
専攻医　　宮本　孝則
専攻医　　田中　克樹
専攻医　　原田　友梨
専攻医　　水谷　乃梨

吉田　未識医師の退職があり、吉本　拓郎医師、池田　翔医師、多湖　孟裕医師、小泉　和久医師の赴任があった。また、それまで病院事業管理者であった寺井勝医師が教育担当に変更となった。
小児科専攻医については、小児科専門研修のプログラムに沿い、異動があった。
年度途中より、高柳正樹医師による遺伝専門外来を開設した。

③外来（令和５年４月１日時点）
専門外来
月曜：高田展行（循環器）、千葉大医師（内分泌）、齋藤江里子（小児外科）
火曜：内田智子（神経）、寺井勝・立野滋（循環器）、光永哲也（小児外科）、田中絵里子（小児腎臓）
水曜：田邊雄三・高梨潤一（神経）
木曜：寺井　勝（循環器）、橋本祐至（神経）金澤正樹（代謝・消化器）
金曜：寺井　勝・立野滋（循環器）、加藤いづみ（アレルギー）、光永　哲也（小児外科）
　　千葉県こども病院医師（整形外科）
小児一般外来
　杉田恵美、森山陽子、小玉隆裕、鋪野歩、他

３．診療実績
外来延べ患者数：21169 人（初診：6975 人、再診：14194 人）、紹介患者数：1452 人
新規入院患者数

新規入院患者数	31 年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
小児科	2,202	1461	1825	1,748	2321

救急車搬送受入数

	31 年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
小児科	1,716	1,127	1,586	2249	2904
小児科夜急診	661	188	262	504	584
小児科総数	2,357	1315	1848	2753	3488

〈主な入院患者の疾患別内訳〉
　令和５年度は、５月に新型コロナウイルス感染症が２類感染症から５類感染症に変更となり、その後夏にかけて RS ウイルス感染症の大流行に加え、ヒトメタニューモウイルス感染も同時に流行したこ

とから、気道感染による入院患者数が大幅に増加した。
　ヒトメタニューモウイルス感染 35 名、RS ウイルス感染 55 名、COVID-19 による入院 16 名に加え、他の気道ウイルス感染症や細菌二次感染による入院の増加がみられた。ノロウイルス胃腸炎においても、前年度以上の入院数であった。また川崎病による入院が 136 名と過去最大数となった。
　食物経口負荷試験検査は前年と件数はさほど変わらず 556 件行った。
　コロナ禍以降増加している神経性食思不振症による入院は 4 名、意図的な薬物過量内服による入院 7 名と増加が目立った。

４．教育・研修・その他の活動
①教育・研修
　日本専門医機構が承認する、小児科専門研修プログラム（基幹型）病院として小児科専攻医の専門研修を実施しています。令和 5 年度本院採用の小児科専攻医は 6 名でした。
　初期研修医延べ 25 名、小児科専攻医・後期研修医延べ 13 名の小児科研修が実施されました。千葉大学医学部学生 9 名の小児科実習を行ないました。令和 5 年度末で千葉市小児科医会と共催している海浜病院公開カンファレンスは 287 回を迎えました。
　新型コロナウイルス感染症流行の頃からオンライン形式となった公開カンファレンスは、現在もオンライン形式で継続し、対面式の頃より参加者は多くなっています。
②その他の活動
　市原市の時間外小児２次救急輪番を火曜日と第２・４金曜日の担当を継続し、新たに日曜日直と第２・４日曜夜間を担当しました。
　千葉市の 4 か月健診、大網白里市の 4 か月健診、3 歳半健診（R5 年度担当追加）、学校心疾患二次検診に参加しました。千葉市各区の要保護児童対策及び DV 防止地域協議会実務者会議に参加しました。

５．1 年間の総括
　　新規入院患者数は、コロナ禍以前よりも増加し、過去 5 年においては最多となりました。
　令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症へと変更となった影響か、その後夏にかけて RS ウイルス感染の大流行に加え、ヒトメタニューモウイルス感染、細菌感染による気道の二次感染が非常に多かった影響と考えます。呼吸器管理や集中治療が必要な重症例も例年より多くみられました。
　千葉市夜間応急診療の時間帯は前準夜・準夜と引き続き短縮しておりますが、上記感染流行を受けて、救急車搬送受入数は 3488 件と、開院以来最多となりました。呼吸障害や低酸素血症、感染による発熱に伴う有熱時けいれんや意識状態の変化等が主な搬送理由となっていました。
　また、コロナ禍以降増加している神経性食思不振症による長期入院、意図的な薬物過量内服による入院が 7 名と増加がみられており、心理面での評価が必要とされる年長児の入院が目立ってきています。
　市原医療圏の小児救急を担う小児科医師の不足が進んでおり、平日週 2 日（うち 1 日は隔週）の二次救急当番病院を週末の日曜に対応拡大しました。
　小児病棟では新型コロナウイルス感染病床 5 類以降後も県のコロナ病床 2 床を引き続き設置し、他の感染症と平行して診療を行いました。
　当院で小児科専攻医・後期研修医を希望する医師のへの病院説明会を、令和 5 年度も引き続き現地とオンラインのハイブリッド形式で実施し、定員での応募がありました。

６．今後の目標
　2026 年秋に開院予定の新病院では、救急科と連携して、ER 型救急をさらに充実し、重症児の管理も診療体制が整備され、向上される予定です。また高速道路からのアクセスが良好となり、ヘリポートが設

置され、より広域な地域からの小児救急患者受け入れが可能となります。
　令和５年度は、流行する感染症診療と並行して、多くの救急疾患対応を行いました。特に夜間の救急対応においては、小児では対応可能な施設は大変限られており、小児科医不足である医療圏にも、引き続き目を向け、医療の提供を続ける必要があると考えています。
　令和６年度より始動となる、医師の働き方改革にも備え、時間外の救急対応を不安なく行っていくためには、小児科医の確保が重要と考えます。
　次世代の小児医療を担う医師を育成するため、小児科専門研修施設としてよりいっそうの充実を図り、小児科専攻医・後期研修医の確保、指導につとめます。
　小児医療において問題となっている移行期医療や社会的養護を要する貧困や虐待などの対応、重症心身障がい児者のケア、発達障害・ 精神・行動・心身医学的な診療に対し、地域の需要に応えられるように引き続き整備していきます。先天性心疾患の移行期医療では、県内唯一の先天性心疾患専門医総合修練施設であり、様々な診療部門のみならず多施設との連携を行い、診療体制を構築していきます。

小児科 HP：http://www.city.chiba.jp/byoin/kaihin/shinryou_syounika.html
海浜病院リクルートサイト：http://chibacity-kaihinhp-recruit.jp/